

タイトル：チームでつくる医療、地域でつかむ誰も取り残さない支援のあり方

学校名：市立札幌開成中等教育学校

学科名：コズモサイエンス科

学年：1年

氏名：西本憲空

世界3位の経済都市であると同時に、全米のホームレスの約25%がいるとも言われるカリフォルニア。深刻なホームレス問題を抱える地域では、歩道上や幹線道路沿い、公園、オフィス街、さらには高級住宅街にまでテントが立ち並ぶようになっている。ホームレスは当事者自身における問題だけでなく、こうしたホームレスの人々が暮らすテントが犯罪や麻薬取引の温床となっていたり、衛生環境や治安の悪化に影響している。こうした現状の中である事実には私は衝撃を受けた。私は英語学習の一つとして言語交換アプリで様々な国の人と連絡を取ったり、アプリ上で集まった複数の人と趣味について電話をしたりしているのだが、そこで「アメリカのホームレスが医療機関によって道に置き去りにされた」という話を聞いた。これは医療費が払えず、退院後の引き取り手がいないホームレスが一部の病院によって見放されてしまうということである。これによって、病状が回復したホームレスの病状が再び悪化し、医療機関も圧迫させるという負の循環が起きているのだ。こうした中で、公共医療のあり方に私は疑問を持っている。

カリフォルニア州を始めとするアメリカ全土で住宅価格の上昇や全般的な物価の上昇があり、賃金の上昇もそれに追いつくほどではない。こうした背景に加えてトランプ政権から広がる社会的な移民への厳しい雰囲気もホームレスの増加を加速させている。例えば、ホームレスが公園や歩道で寝泊まりするのを禁止し、違反した場合、罰金を科し、逮捕・投獄することを認める条例である「キャンプ禁止条例」をアメリカ最高裁は支持していたり、トランプ大統領はホームレスを排除しようとする政策も打ちだしている。このような社会的な背景により、ホームレスの生活はますます厳しくなり結果的にその地域の医療機関は財政的に厳しくなるだろう。また、多くのホームレスは慢性的な病気や精神的な問題を抱えており、医療へのアクセスが難しい。しかし同州では、州政府やNPO、地域医療機関が協力し、無料診療や移動診療車による支援、精神保健ケアの提供などを行っている。また、大学や学生ボランティアが医療支援活動に関わる例も多く、社会全体で課題に向き合う文化がある。このように、この地域の医療は決して余裕があるとは言えないが「チーム」として医療に向き合う姿勢があるのだと考えている。

私はカリフォルニアの地でホームレスの人の精神的・肉体的なサポート、そこでの暮らしの実情、そしてその地域に根ざす地域医療の役割と生活困窮者との共存の取り組みについて、「医療が人と社会とを繋ぎ、支える力」を感じ取りたい。医療は患者が例えば犯罪を犯した人であっても、限りなく助かる可能性の低い人であってもその人を大切に思う人のもとへ返すのが使命だ。その上で、ホームレスとその地域の人々の命を逼迫するカリフォルニアの医療でどのように守っているのか知ることによって私のある夢に近づきたい。

私は豊かな自然とバリエーションに富んだ食に囲まれ、苦労は協力して乗り越えようとする温かい道民の暮らす、この北海道の地が大好きだ。しかし、北海道の人口減少数は直近の調査で全国最大であり、今後多くの公共サービスの維持が益々困難になっていくことが予想される。特に地域医療は、人口の少ない市区町村を中心に高齢化率の増加による医療需要の変化に対応しつつ医師不足の中で医療を提供し続けていくことが課題となっていくだろう。このような背景から自身のスポーツでの経験を活かし、「地域医療×スポーツ医療で北海道の地域医療の課題を改善するには？（カナダ、NZ、ドイツなどとの比較を通して）」という研究を行ってきた。スポーツを通じた健康づくりを軸に根本的な医療需要の解決とチーム医療の促進を図ることを目的に研究を続けている。将来的には、アスレティックトレーナーの資格を持ったスポーツ整形外科医として北海道の地域医療を支え、スポーツの視点から地域医療の問題解決に取り組みたい。その上で、カリフォルニアは多くのホームレスが住み、逼迫した医療体制の中で人々の命を守り、「チーム」として学生や支援活動を行う団体を中心とした社会的に一丸となった医療の姿がある。また、スポーツ産業も盛んで地域の人々のスポーツに対する意識も高いと考えられる。そのため、更なる逼迫が予想される北海道の地域医療の中で、他業種、患者、住民が一丸となった「チーム」と

しての医療をスポーツという視点を加えて取り入れ、こういった地域医療の課題解決に取り組みたい。

私は、多数のホームレス、活発なスポーツ産業、そして他業種、住民との協力の中にある「チーム」として地域医療を通して、カリフォルニアで「医療が人と社会とを繋ぎ、支える力」を実感し、自身の研究に活かすと共に、将来的にスポーツを通じた北海道の地域医療の維持、そして発展に寄与していきたい。